

中国国家図書館蔵『目連変文』写本五点

荒見泰史

まえがき

筆者は、2002年8月に中国北京の中国国家図書館において、敦煌の文学文献および宗教文献に関する調査をおこなった。なかでも変文など講唱文学文献の調査では、講唱体文献およびその周辺資料とされる故事綱要体（唱導書類）の写本を一通り調査することができ、これまでの写真資料による研究で見過ごされてきた点も数点発見することができた。

本稿では、そのうち国家図書館が多数所蔵する目連変文写本の調査結果について報告しておこうと思う。

中国国家図書館と所蔵敦煌文献について

まず筆者の訪問した中国国家図書館と、所蔵される敦煌文献について簡単に紹介しておく。

中国国家図書館は、京師図書館（宣統元年、1909年創設）、国立北平図書館（1928年改名）、北京図書館（1950年6月改名）から1998年12月に改名された中国最大の国立図書館である。

この中国国家図書館が所蔵する敦煌文献は、1910年の清朝調査隊、1919年の民国調査隊が収集した敦煌文献を中心とするものであり、さらに後に個人蔵書家へ流出していたものを買取るなどして、現在では16000点以上を数える⁽¹⁾。また最近までに、破損した文献の修復作業もほぼ完成しており、1979年に日本に齎されたマイクロフィルムが作成された頃よりは、各段に調査しやすくなっている⁽²⁾。これら修復後の敦煌文献は、上海古籍出版社『敦煌吐魯番文献集成』によって高画質の複製もすでに公開されつつある⁽³⁾。また中国国家図書館特蔵部の敦煌吐魯番研究中心では、林世田氏等を中心としてIDP（The International Dunhuang Project）という敦煌文献の電算化、それに付随する新目録作成作業、そのインターネット上での公開といった作業も着々とすすめられつつあり、現地⁽⁴⁾に赴かずとも、ある程度までは文献を検索しうるようになっている。このように、中国国家図書館は、国内外の敦煌研究者および唐代史研究者等に貴重な資料を提供し続けているのである。

中国国家図書館に蔵される敦煌文献の中で、筆者が専攻している文学文献、

とくに変文に関しては⁽⁵⁾、講唱体変文類や、筆者が最近“故事綱要本（唱導書類）”と称して研究調査をおこなっている講經の種本、台本となったと見られる写本類が数多く蔵され、変文研究上、質、量ともに充実している。無論、これらのほとんどはマイクロフィルムや複製本などが公開されており、日本でも容易に検索することができる。しかし、講唱体写本などでは、実際の唱導、講經の実態を知るうえで、朱筆や薄墨の使用状況や写本の細部の状態を把握することが重要となるので、今回あえて実写本の調査をおこなったのである。

今回の調査で、筆者はこうした変文研究の一環として、講唱体変文類や故事綱要体類などを中心に調査をおこなうことができた。

講唱体変文とは、おもに仏教の講經などで台本として使用されていた、あるいは講經の内容を整理したもの、と考えられる作品群で、文体から見れば「語り」の散文部分と歌唱する韻文部分を交互に配置するという、話本小説と似た特徴をもつ。これらは敦煌の五代文献のみに見られる文学作品群で、完全な形で残されているものは少なく、部分的に抄録されたり、廢紙の背面を利用して書かれるなど、実用に供されたと思われる写本が多い。このような特徴から、講唱体変文はのちの宋代話本、明清小説、評話、彈詞などの芸能につながる民間文芸の祖型として、発見当初より注目を集めてきた⁽⁶⁾。また最近では、その講唱体変文へと発展する前段階として、唱導書のような説話の綱要本が存在していたことが明らかとなり、関心を集めつつある。これが故事綱要本類である⁽⁷⁾。

今回の調査で、変文関連で調査をおこなったのは以下の文献である⁽⁸⁾。

説唱文学文献

a. 講唱体文学文献

- (1) 北京7707（盈76、旧番号、以下同じ）『大目犍連冥間救母変文』
- (2) 北京8443（霜89）『（擬題）大目乾連冥間救母変文』
- (3) 北京8444（成96）『（擬題）目連変文（一）』
- (4) 北京8445（麗85）『（擬題）大目乾連冥間救母変文』
- (5) 北京8719（水8）『（擬題）目連変文（二）』
- (6) 北京8439（衣33）『（擬題）地獄変文』
- (7) 北京8437（雲24）『八相変』
- (8) 北京8438（乃91）『（擬題）八相変』
- (9) 北京8671（麗40）『（擬題）八相変』
- (10) 北京8435（光94）『（擬題）維摩經講經文』
- (11) 北京8436（潛80）『（擬題）太子成道変文』
- (12) 北京新866『（擬題）李陵変文』

b. 故事綱要本文献

- (13) 北京8407（鳥16）『衆經要集金藏論』
- (14) 北京8416（騰29）『仏説諸經雜緣喩因由記』

(15) 北京8432 (衣28) 『(擬題) 諸経雑抄』

(16) 北京8434 (裳94) 『(擬題) 諸経要集』

(17) 北京8695 (結78) 『(擬題) 本生故事』

(ほかに、写本は未見であるが北京8670 (洪62) 榜題稿なども、唱導に使われた可能性があり、故事綱要本研究では重要である)。

c. 韻文体文学文献

(18) 北京8441 (皇76) 『勸善文』『悉達太子讚一本』

中国国家図書館蔵の敦煌文学文献では、目連変文類、仏伝故事類などの所蔵点数が多い。さらにこれらを並べて調査することによって、『目連変文 (一)』『目連変文 (二)』『大目乾連冥間救母变文』の三種や、『八相变』『悉達太子讚一本』の二種のように、同一内容の物語なのに異なる作品に仕上げられているものや、一方の作品がもう一方の作品の一部に取り込まれているものがあるなどの点に気づくことができる。こうした複数の作品の間に見られる共通箇所⁽⁹⁾の調査は、変文発展の経緯を考えるうえで重要であることは、言うまでもない。

この点について、次章に筆者の考えを簡単に紹介しておこう。

複数存在する関連作品と変文の発展経緯

先にも言うように、変文は講経などの台本または種本の類と考えられる作品群であり、通俗化された唱導や講経などで実際に上演された場により近い、文学作品と考えられている。となれば、著名な文人の詩文などのように整理、完成された作品とは、本質的に異なる点がある。

実際の表演に近いということは、あたかも戯劇の台本が上演される時間や場所に依じて演出を変えていくように、その場の必要に応じて多少加工されたり改編される可能性があるということである。変文が演じられていた寺院内の通俗講経の場や、盛り場、街頭でも同じことがおこなわれたことが推測され、変文の作品に対しても、その場その時に依じた何らかの改編がなされていたと予測しておくのが自然であろう。現存する敦煌変文の写本を見る限りでも、作品を加工することは確かにおこなわれていたようである。敦煌文献に、同じ題目、同じ題材で複数の作品が残されているのは、こうした演出上の事情によるのではないか、少なくとも筆者は、そのように推測しておいた方が説得力があると考えている。

たとえば、孝子舜子の話として有名な S.2721V 『舜子至孝变文』(S はスタイン文献、V は背面文書を示す) を例としてみよう。この作品は文体分析をすると明らかなように、韻文体、故事綱要本などの異なる作品を組み合わせて作り上げたものである。おおむね、物語を文章にまとめるのに、自分で新たな文章を作らず、複数の文章を部分的に拝借して簡単に文体を整えたもの、と見

ることができる。結果、S.4654『舜子変』と同じ韻文体の文体は見え隠れするものの、前後不揃いの異なる作品に仕立てあげられているのである。

もう一例あげておこう。仏伝故事の講唱体作品として、ほぼ同じ内容である『太子成道経』『八相変』『悉達太子修道因縁』『(擬題)太子成道変文』などは、文体上それぞれ異なるところは多いが、同一の文を利用している箇所も少なからず見られる。

また、同一内容の作品を利用するものばかりか、異なる作品で、同一文を利用しているものもある。『破魔変』(S.3491)と『頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因縁変』(S.3491)の二作品間や、『八相変』(北京8437、北京8438、北京8671)と『太子成道経』(P.2999、S.2682、S.2352)、『悉達太子修道因縁』(S.2682、S.2352、S.4626)三作品間がそれぞれであるが、これらの冒頭部分では、異なる作品ではあるものの、共通する文が利用されている。

以上のように、他の作品を利用して新たな作品を作成したり、加工したりすることは、変文作品中、広く見られることなのである。

このような訳で、変文研究の中では、複数の作品を比較して発展経路などを調査することは重要である。どのような改作がなされていったかを明らかにすることによって、変文の実際の用途を知る手がかりともなりうるからである。

本稿で取り上げようとする一連の目連変文は、すべての敦煌変文中、仏伝故事類について多くの写本が、しかも、複数系統にわたる写本が残されている作品なのである。

目連変文写本について

現存する目連変文の写本は、北京国家図書館蔵本のほか、パリフランス国立図書館蔵のペリオ文献(番号は以下P.と省略)、ロンドンの大英図書館蔵スタン文献(番号は以下S.と省略)など、以下の四系統、十二点が現存していることが確認されている。

1. 『大目乾連冥間救母変文』

- (1) S.2614 R:大目乾連冥間救母変文
存421行
首題:大目乾連冥間救母變文並圖一卷並序(並圖の二字は墨で抹消)
尾題:大目健連變一卷
V:(敦煌各寺僧尼名簿)
識語:貞明柒年(921年)辛巳歲四月十六日淨土寺學郎薛安俊寫。張保達文書。
(筆者注:Rは正面文書、Vは背面文書。以下同じ)。

- (2) P.2319 R: 大目乾連冥間救母變文
 首題: 大目乾連冥間救母變文
 尾題: 大目健連變文一卷
 存261行
 重要記載: (首題下) 其偈子每械三兩句、後云云是。
- (3) P.3485 R: 大目乾連冥間救母變文、(1行漢文) 張大慶記 (この記載は背面文書と思われる)
 首題: 目連變文
 尾題: 欠
 存126行
- (4) P.3107 R: 大目乾連冥間救母變文一卷並序
 首題: 大目乾連冥間救母變文一卷並序
 尾題: 欠
 存31行
 V: 大目乾連變文一卷 (題目)、(淨土寺大祥追福設供伏願誓受佛救疏)
 識語: 大唐國……戊寅年 (918年?) 六月十六日。
- (5) P.4988 R: (莊子殘卷)
 V: (大目乾連冥間救母變文)
 首題: 欠
 尾題: 欠
 存34行
- (6) 北京7707 R: 仏説無量壽宗要經
 (盈76) 識語: 田廣談
 V: 大目健連變文
 首題: 欠
 尾題: 大目健連變文
 存132行
 寫成年代: 977年
 識語: 太平興國二年歲在丁醜潤六月五日顯德寺學仕郎楊願受、一人恩微 (惟)、發願作福、偈寫此目連變一卷、後同釋迦牟尼佛嘗會彌勒生作佛為定、後有衆生、同發信心、寫偈目連變者、同池 (持) 願力、莫墮三途。

- (7) 北京8445 R : (大目乾連冥間救母変文)
(麗85) 首題：欠
尾題：欠
存63行
V : (殘唐律)
参考：マイクロフィルムなどに見られる背面の「殘唐律」は、補修のために張られた文書である。現在では修復を経て剥離され、他の番号に改編されている。
- (8) 北京8443 R : (大目乾連冥間救母変文)
(霜89) 首題：欠
尾題：欠
存62行
V : (殘変文)
参考：マイクロフィルムなどに見られる背面の「殘変文」は、補修のために張られた文書である。現在では修復を経て剥離され、他の番号に改編されている。
- (9) S.3704 R : (大目乾連冥間救母変文)
首題：欠
尾題：欠
存25行

2. 『目連縁起』

- (10) P.2193 R : 目連縁起
首題：目連縁起
尾題：欠
存241行
識語：界道真本記
V : (題目) 大目連縁起

3. 『目連変文 (一)』

- (11) 北京8444 R : (目連変文)
(成96) 首題：欠
尾題：欠
存65行

V：(寺院文書)

4.『目連変文(二)』

(12) 北京8719 R：(追悼文)

(水8) 識語：1行目 維大唐天福四年(939年)歲次丁亥…
(目連変文)
首題：欠
尾題：欠
存59行

V：(薬師道場文)

(注：他仏名等数行)

今回筆者が調査した中国国家図書館蔵文献は、上記の四系統十二点中の三系統五点と、多数を所蔵している。また、同一系統の写本でも異なる趣旨で筆写された写本も数点ある。たとえば、もっとも多数現存する『大目乾連冥間救母変文』系統の写本のなかでも、(6)北京7707のように供養經として作成されたものや、また(7)北京8445のように巻数を分けて書かれているものなどがある。

別系統の作品である北京8444『(擬題)目連変文(一)』や、筆者が今回新しく気づいた北京8719『(擬題)目連变文(二)』などは、国家図書館のみに所蔵されるものであるばかりか、講經などの儀式に直接関わっていたことを証明する貴重な例である。

以下に、各写本の状況を紹介し、それぞれに対する筆者の見解を述べてみようとおもう。

北京7707(盈76)(背面)『大目健連冥間救母变文』

高さ31cm、長さ215cm、12張(各張の紙幅は、以下のとおり。〈前欠〉①3cm、②44.5cm、③45.5cm、④45.5cm、⑤15cm、⑥42cm、⑦43.5cm、⑧43.5cm、⑨20cm、⑩45.5cm、⑪46cm、⑫28cm)。

1～7張と8～12張では紙質もかわる(背面から見た場合)。正面文書から見た場合、前段は『仏説無量寿宗要經』であり、後段は異なった記載がなされている。しかも前段と後段は無造作に接合されており、一見して後になって張り合わされたものであることがわかる。それに対し、背面文書では前後一貫して『大目乾連冥間救母变文』が記載され、罫線も紙の前後段を通して引かれている。この点から見て、廃紙を繋ぎあわせて背面の『大目乾連冥間救母变文』を記載したものであることは一目瞭然と言える。

この写本の『大目乾連冥間救母变文』の記載上に見られる特徴としては、変文の記載の間に大きく空欄が残されている点が最も目を引く。

マイクロフィルム等では文字が記載されている箇所を中心に撮影されている

ので、その空間の広がりを実感することは難しいが、実写本を広げて閲覧すると、ちょうど絵巻物のようにあることがわかる。ちなみに、始めの空間は103cm、二つ目は26cm、三つ目は31cm、四つ目は17cm、五つ目は50cmで、本文部分にはすべて罫線が引かれているのに対して、この空間部分には罫線が引かれていない。おそらく、あとで絵画を描き入れるために長さを測って空間を残しておいたのに、何らかの事情によって文字を書き入れられた段階で放置され、絵画が描き入れられなかったものと考えられる。また廃紙を利用し、かつ前後の紙を繋げる張り合わせ面もかなりいいかげんに取ってあるところから見て、下書きとして作成された可能性も想定されるべきかもしれないが、末尾に供養経であることを示す識語が記されている点をあわせ考えた場合（後述）、これを下書きとは考えにくいのではないかと思う。

参考のために、前後を繋ぎ合わせた箇所を写真（図1）と翻刻によって紹介しておく（音通仮借字は（ ）を以て示し、脱字は〔 〕を以て示す）。

- 75 啓言長者：「頻道阿嬢亡過後、魂神一往落阿鼻、近得如來相救出、身如枯骨氣如絲。
- 76 貧道肝腸寸々斷、痛切傍人豈得知、計亦不合非時乞、為以慈親而食之。
- 77 長者聞言大驚愕（愕）、思寸（忖）无常情不樂、金鞍永絕臍珠心、玉貌無由上莊（妝）閣。但且歌、但且樂、
- 78 人命々（由由如）轉燭、何不見天堂受快樂、唯聞地獄罪人多。有時喫、有時著、莫學愚人多貯積。
- 79 不如廣造未來因、誰能保命存朝夕。兩々相看不覺死、錢財必莫於身惜。一朝辭手入長棺、
- 80 空澆塚上知何益。智者用錢多造福、愚人將金買田宅。平生辛苦覓錢財、死後忽被他分朽（擘）。
- 81 長者聞語忽驚疑、三寶福田難可遇、急催左右莫交（教）遲、家中取飯以闍梨。地獄忽然消散盡、
- 82 明知諸仏不思議。長者手中執得飯、過以闍梨發大願、「非但和尚奉慈親、合獄罪人皆飽滿」。
- 83 目連乞得耕（粳）良飯、持鉢將來獻慈母、于時行至大荒郊、手捉金匙而自哺。
- （空欄17cm）
- 84 青提夫人、雖遭地獄之苦、慳貪久（究）竟未除、見兒將得飯鉢來、望風即生忧惜。「來者三
- 85 寶、即是我兒、為我人間取飯、汝等令人息心。我今自療、況復更能相濟」。目連將飯并鉢奉上、阿嬢恐
- 86 被侵奪、舉眼連看四畔、左手彰鉢、右手團食。々未入口、變為猛火。長者雖然願票（重）、

- 87 不那慳鄣尤深。目連見母如斯、肝膽猶如刀割。「我今聲〔聞〕力劣、智小人微。唯有啓問世尊、應知濟拔之路」。
- 88 具〔且〕看〔與〕母飯處：夫人見願向前迎、慳貪未喫且空爭、我兒遠取人間飯、將平〔來〕自擬療飢坑。
- 89 獨喫猶看不飽足、諸人息意慢承忘、青提慳貪業力重、入口喉中猛火生。目連見母喫飯成猛火、
- 90 渾槌自撲如山崩、耳鼻之中皆流血、哭言「黃天我孃々。南閻浮提施此飯、飯上有七尺往神光。
- 91 將作是香美飲食、飯未入口變成火。只為慳貪心不改、所以連年受其罪、如今痛切更無方、
- 92 業報不容相替代。世人〔不〕須懷嫉妒、一落三塗罪未畢、香飲未及入咽喉、猛火從孃口中出。
- 93 俗間之罪滿娑婆、唯有〔慳〕貪罪最多、火既無端從口出、明知業報不由他。一切常行平等意、
- 94 亦復壽〔專〕心念彌陀、但能捨却貪心者、淨土天堂隨意至」。青提喚言「孝順兒、罪業之身不自亡、
- 95 不得阿〔師〕行邪孝道、誰肯艱辛救耶孃。見飯未能抄入口、見火無端却損傷、慳貪去得將心念、
- 96 只應過有百餘殃。阿師是孃々孝順子、与我冷水濟虛腸」。目連聞阿孃索水、氣咽聲
- 97 嘶。思忖中間、忽憶王舍城南有一大水、闊浪無邊、名曰恒河之水、亦應救得阿孃火
- 98 難之苦。南閻浮提眾生、見水即是清涼冷水。諸天見水、即是瑠璃寶池。魚鱉見
- 99 此水、即是瀾澤。青提見水、即是膿河猛火。行至水頭、未見兒咒願、便即左手
- 100 托岸良由慳、右手抄水良由貪、直為慳貪心不止、水未入口變成火。目連見阿

また、この写本が何の目的で書かれたのかを示す識語も巻末に残されている。識語の記載は以下の通りである。

- 130 太平興國二年歲在丁丑潤六月五日顯德寺學仕郎楊願受、一人思微（惟）、
- 131 發願作福、盡寫此目連變一卷、後同釋迦牟尼佛嘗一會彌勒生作佛
- 132 為定。後有衆生、同發信心、寫盡目連變者、同池（持）願力、莫墮三途。

この記載によって、この写本が顯德寺の学仕郎である楊願受によって太平興國2年（977年）頃に書かれた供養經であるとわかるのである。

絵巻物と供養経とは繋がりにくく思われるかもしれないが、絵画を伴う供養経としては、敦煌本ではS.3961『仏説閻羅王授記四衆預修生七往生浄土経』（敦煌十王経、甲類）があり、参考とすべきであろう。本経は他にP.2003、P.2870、P.3767等の三種があるが、S.3961は絵の質が他本に比べて著しく低く、また経典内には供養経を作成することの功德も述べられていることから、同写本は供養のための写経であると推測されるのである（ただし、北京7707とS.3961の二者には異なる点もある。北京7707背面では絵画のスペースを予測してまず罫線を記入し、文字を書き入れたことが見て取れるが、S.3961では、絵画を避けるように窮屈に文字が書き込まれている箇所が何箇所も見られ、絵画が先に描かれたことがわかるのである）。

注目すべきは目連変文には、「且看……処（……の場面を見よ）」の記載が多く見られたり、S.2614の題目が『大目乾連冥間救母変文並図一卷並序』（並図の記載は墨で抹消されているが）とされていることによって、絵解きの台本であったという学説が早くから出されていたが、これまで実際に使用された絵画は発見されていなかったことである⁽¹²⁾。目連変文に伴う絵画を研究しようとする場合、この北京7707は貴重な資料となるであろう。

さらに、この写本から読み取ることのできるものとして、もう一点注目しておきたい点がある。

この北京7707のように、講唱体変文がこうした形で絵画を伴う供養経として作り変えられたということは、類似する文体で、しかも同じ形式で供養経が作成されている『仏説閻羅王授記四衆預修生七往生浄土経』も、本来は、変文と同じように絵解きが行われていた、と推測できるのではないかと。実際に『仏説閻羅王授記四衆預修生七往生浄土経』は、「謹啓諷『閻羅王預修生七往生浄土経』。誓勸有縁以五会啓経入讀、念阿弥陀仏」という儀式で唱えられる文句をそのまま記載しており、法会で使用された台本などを元にしたものであることは容易に推測される。それに『仏説閻羅王授記四衆預修生七往生浄土経』の韻文部分は大足宝頂山「地獄変龕」にも残されていることから、同時代に敦煌成都一帯で広く歌われていたものである可能性もある⁽¹³⁾。また、大足では最近まで「引香師」と呼ばれる人が、絵解き語りをしていたという報告もある⁽¹⁴⁾。推測の域を出ないが、以上によって『仏説閻羅王授記四衆預修生七往生浄土経』が、用途のうえで、絵解きの変文と深い関係を持つ作品だったと考えることができるのではないだろうか。

北京8443（霜89）『（擬題）大目乾連冥間救母変文』

高さ25cm、長さ106.5cm。3張（①44cm、②43cm、③30.5cm〈後欠〉）から成っている。正面は『大目乾連冥間救母変文』の後半の部分で、63行が残されている（図2-1・2）。

(前欠)

- 1 青提夫人、雖遭地獄之苦、慳貪究竟未□□□□□□□□
 - 2 望風〔即〕生吝惜。來者三寶、即是我兒、為我人間取飯、汝等令人息
 - 3 心。我今自救無療、況復更能相濟。目連將飯并鉢奉上、阿
 - 4 孃恐被侵奪、〔舉〕眼連看四畔〔伴〕、左手彰鉢、右手團食。食未入口、
 - 5 變為猛火。長者雖然願重、不那慳鄣尤深。目連見母如斯、
 - 6 肝膽由〔猶〕如刀割。我今聲聞〔力〕劣、智小人微。唯有啓問世尊、
 - 7 應知拔濟〔濟拔〕之路。且看与母飯處：
.....
 - 56 阿孃作一黑母苟〔狗〕身、從宅裏出來、便捉目連袈沙〔袈〕。
 - 57 咸着即作人語、喚言：「孃孃〔阿娘〕孝順子、嘗〔忽〕是能向地獄〔冥路〕之
 - 58 中救阿孃來、可〔因何〕不救苟〔狗〕身之苦？」。
 - 59 目連啓言：「慈母、由兒不孝順、央〔殃〕及慈母、墮落三塗、寧作苟〔狗〕
 - 60 身於此？寧在地獄我□之途？」。阿孃喚言：「孝順兒、受次〔此〕
 - 61 苟〔狗〕身音啞報、行住坐臥得安寧〔得存〕。飢即〔好于〕坑中食人不淨、
 - 62 渴飲長流以濟虛。朝聞長者念三寶□□□□□□□□
- (後欠)

なお、『敦煌遺書総目録』等の目録類では、背面に『〔擬題〕殘變文』ありとされるが、この『〔擬題〕殘變文』は、おそらく補修のためにここに張られていた文書の断片である。現在では、國家図書館の補修作業を経て剝離されたために、北京8443の上にはない。他の番号に改編されたようである。

北京8445 (麗85) 『〔擬題〕大目乾連冥間救母變文』

高さ28.5cm、長さ120cm。長さのまちまちな6張(①28.5cm、②26.5cm、③8.5cm、④15cm、⑤42.5cm、⑥2cm〈後欠〉)が張り合わされている。

『大目乾連冥間救母變文』の記載は本写本の正面に残されている。前後は欠けていて題目、識語等は残されていないが、内容は他の『大目乾連冥間救母變文』系統の写本とほぼ一致している。

この写本の他写本と異なる特徴は、写真にも見られるように『大目乾連冥間救母變文』が中ほどで二段に分断され、後段の始めに「卷第二」と記載されていることである。このような例は『大目乾連冥間救母變文』では見られないが、北京8444(成96)『〔擬題〕目連變文(一)』開頭に「上来所説序分竟。自下第二正宗者」とあったり、北京8439(衣33)『〔擬題〕地獄變文』に「從次第二」などとあったりするのを想起させるのに充分である。この写本が、より実際の通俗講經に近いものであったことが推測される。

またこの写本は、韻文部分の分かち書きがいいかげんであったり、普通字を多く用いたりしているなど、初歩的な間違いが目立つ。しかし朱点によってきちんと断句され、韻文部分の間違いも朱筆によって訂正されている。

巻を分ける箇所を写真（図3）と翻刻で示しておく。

- 21 自摸（撲）、由（猶）如五太山崩、七孔之中皆流迸血。良久兒（而）死、復乃重蘇、
- 22 兩手按地氣（起）來、政（整）頓衣裳、騰空往向（至）世尊之處：
- 23 目連情地忽昏昏、人語冥々似不聞、量（良）久沈吟而性悟、擲鉢騰
- 24 空問世尊。（朱点）目連對仏稱怨苦、具說刀山及劍樹。（朱点）「蒙仏神力借餘威、
- 25 得向阿鼻見慈母。（朱点）鐵成（城）煙焰火騰々、劍刀森林數萬層。（朱点）人脂碎宍（肉）和銅汁。（朱点）迸肉含
- 26 潭血裏凝。（朱点）慈親容貌豈堪任。（朱点）長夜一（朱線）遭他刀劍侵。（朱点）白骨萬迴登劍樹。（朱点）紅顏百過
- 27 上刀林。（朱点）天下之中何者重。（朱点）父母之一（朱線）情恩最深。（朱点）如來是眾生慈父母。（朱点）願照
- 28 愚迷方寸心。（朱点）」。如來本自大慈悲 聞語慘地斂雙眉、「眾生出沒於輪網。（朱点）恰
- 29 似蟻蠱兔望絲。（朱点）汝母昔時多造一（朱線）罪。（朱点）魂神一往落阿鼻。（朱点）此罪劫移仍未出、
- 30 非仏凡夫不可知」。仏喚阿難徒眾等、吾往冥途自救之。
（空欄5.5cm）
- 31 卷第二 如來領龍神八部、
- 32 前後圍繞。（朱点）放光動地。（朱点）救地獄之苦 [處]：如來聖智本均平。（朱点）慈悲地獄救眾生。（朱点）
- 33 無數龍神八部衆。（朱点）相隨一隊向前行 隱隱逸逸。（朱点）天上天下。（朱点）無如足。（朱点）左邊沈。（朱点）右
- 34 邊沒。（朱点）如山炭々雲中出。（朱点）催々（崔崔）鬼々、
- 35 天堂地獄一時開。（朱点）行如雨。（朱点）動如雷。（朱点）似月圓々海上來。（朱点）獨自俄々師子步。（朱点）虎行品
- 36 々象王迴。（朱点）雲中天樂吹楊柳。（朱点）空裏鎖（續）芬下落梅。（朱点）帝釋向前持玉諫。（朱点）梵王
- 37 從後奉金牌。（朱点）不可論。（朱点）如來神力救泉門。（朱点）左右天人八部眾。（朱点）東西持衛四方
- 38 神。（朱点）眉間豪（毫）相千般色、項後圓光彩五雲。地獄沾光消散盡、劍樹刀林似碎塵。
- 39 獄卒沾光皆踟躕、合掌一心而礼如來、今日起慈悲、地獄摧賤（殘）悉

- 40 破壊。鐵丸化作磨尼寶、刀山化作瑠璃地、銅汗變作功德水、清良（涼）屈
 41 由邊池流。鵝鴨爲鴛扶淚〔淚〕、紅波夜夜碧煙生、綠樹朝朝紫雲氣、罪人
 總
 42 得生天〔上〕。唯有目連阿孃爲餓鬼、〔地獄一切並變化、總是釋迦聖佛
 威〕。目連蒙佛威重得見
 43 慈母。罪根深結、業力難排、雖免地獄之酸、墮在餓鬼之道。悲辛
 44 不等、苦樂玄（懸）殊。若並前途、感其白〔百〕千萬倍。咽如針孔、滴
 水不通；

北京8444（成96）『（擬題）目連變文（一）』

高さ30.5cm 長さ133cm。3紙半（①42cm、②42cm、③長42cm、④8.5cm〈後
 欠〉）。

正面文書は全65行。前全後欠。同じ目連の故事であるが、『大目乾連冥間救
 母變文』とは大きく異なる。

最も大きな違いはその文体で、特に冒頭の本文書き出しの部分は『賢愚經』
 『撰集百緣經』など、漢訳譬喩經典の書き出しに酷似している。これらの体裁
 は、敦煌文献でも『衆經要集金藏論』（北京8407）、『仏説諸經緣喩因由記』
 （北京8416）など故事綱要本類の文体にも近く、この『目連變文』の背景に、
 故事綱要本もしくはそれを使った講唱文芸があったことを推測させる。いずれ
 にしても、講唱体文献のなかでは早期の形態を残すものと考えている。

冒頭部分を紹介しておく（図4）。

- 1 上來所說序分竟、自下弟（第）二正宗者。昔仏在日、摩
- 2 竭〔陀〕國中有大長者、名拘離陀。其家巨富、財寶無論。
- 3 於三寶有信重之心、向十善起精崇之志。宮中夫
- 4 人、号曰清（青）提、端正雖世上無雙、慳貪又欺誑佛法。
- 5 生有一子、号曰目連、塵劫而深種善因、承事於恒
- 6 沙諸仏。未見我仏在俗之時、家竭所有七珍（珍）、設齋布
- 7 施於一切。忽於一日、思往他方。家財分作於三亭、二分留
- 8 与於慈母、内之一分、用充慈父之衣糧。更分資財、榮（營）
- 9 齋布施於四遠。囑付已畢、拜別而行。母生慳吝之心、
- 10 不肯設齋布施。到後目連父母壽盡、各取命終。父承
- 11 善力而生天、母招慳報墮地獄。或值刀山劍樹、穿穴
- 12 五藏而分離；或遭爐炭灰河、燒炙碎塵於四體。或
- 13 在餓鬼受苦、瘦損軀骸、百節火然、形容憔悴（憔悴）。咽喉
- 14 別（則）細如針鼻、飲嚙滴水而不容；腹藏則寬於太■
- 15 山、盛售三江而難滿。當尔之時、有何言語？
- 16 目連父母並凶亡、輪迴六道各分張。母招惡報墮地獄、

- 17 父承善力上天堂。思衣羅繡千重現、思食珍（珍）羞百味香。
- 18 足躡庭臺七寶地、身倚幃帳白銀床。冥間母受多般苦、
- 19 穿刺燒蒸不可量。鐵磑々來身粉碎、鐵叉々得血汪々。

.....

また、背面文書の記載にも注目をしておくべきであろう。背面は“唱衣”という、寺院内の一種のオークションでの売買と、その儲けの配分を記録する帳簿と思われる。注目すべきは、これと正面の目連変文との関係である。単なる廃紙の利用であるとして、全くの無関係であるとすることも可能であるが、唱衣は僧侶の死後、遺品の処理に際しておこなうという点を考えた場合、葬送⁽¹⁵⁾、供養の儀式などで『目連変文』が演じられたとの推測も成り立つからである。

現に、葬儀の後で目連戯が上演される風習があったことが中国各地で報告されているし、後述する北京8719のように、『目連変文』と葬儀、追悼儀式との関係を残す敦煌文献も、他に見られるのである（ゴシック体は朱筆）（図5-1～4）。

- 1 法律徳榮 唱紫羅鞋兩得布伍伯（百）捌拾尺。支本分一百五十尺。支
- 2 乘巡定真（？）一百五十尺。支乗政會一百五十尺。支？稱
- 3 盈一百五十尺 餘二十尺

- 4 法律保宣 舊律阡捌伯玖拾尺

- 5 僧政願清 唱緋綿綾被得布壹阡伍伯貳拾尺。舊願壹阡尺
- 6 支〔靈〕圖〔寺〕海朗一百五十尺 支〔靈〕圖〔寺〕願護一
百五十尺 支智全一百
- 7 五十尺 支智榮一百五十尺。支〔靈〕圖〔寺〕福盛一百五十
尺。支
- 8 支〔靈〕圖〔寺〕應求一百五十尺。支〔靈〕圖〔寺〕願德一
百五十尺。支〔靈〕圖〔寺〕子興
- 9 一百五十尺。大應一百五十尺。支〔靈〕圖〔寺〕應祥一百五
十尺。支〔靈〕圖〔寺〕應慶一百五十尺。支〔靈〕圖〔寺〕
- 10 大進一百五十尺
- 11 支〔靈〕圖〔寺〕大願一百五十尺。支〔靈〕圖〔寺〕談濟一
百五十尺。支〔靈〕圖〔寺〕廣
- 12 進一百五十尺。

- 13 金剛 唱扇得布伍拾五尺。支本分壹百五十尺。餘九十五尺。
- 14 道成 唱白綾襪得布壹伯柒拾尺。支本分一百五拾尺。支普

- 15 列法一百五十尺。餘一百參十尺。
- 16 道明舊觀參伯玖拾尺
- 17 「法律道英 唱白綾襪得布參伯尺。又唱黃盡(?)得布五伯尺
- 18 支〔靈〕圖〔寺〕道明一伯五十尺。支本分一百五十尺。支
〔靈〕圖〔寺〕祥定一百五十
- 19 尺。支〔靈〕圖〔寺〕談宣一百五十尺。支〔靈〕圖〔寺〕談
惠一百五十尺。支〔靈〕圖〔寺〕戒
- 20 云一百五十尺。支雲賢惠一百五十尺。支云祥通一百五
- 21 □□□□□□□□□□□□ (以下欠)

北京8719 (水8) 『(擬題) 目連變文 (二)』

高さ29.5cm、長さ127.5cm。4張 (①42cm、②38.5cm、③42.5cm、④12cm <後欠>)。
3張目と4張目の間は接合部分5cm。

正面の1張目は大唐天福4年歲次丁亥(天福4年、939年は唐ではなく後晋)の追悼文19行と雜写3行。

正面の2張目と3張目に、『目連變文』が記されている。

背面は『葉師道場文』25行ほか、仏名などが書かれ、計62行が残されている。

問題となるのが正面の『目連變文』である。本『目連變文』の存在については、すでに目録類などに紹介されており、『敦煌宝蔵』など複製資料でも『目連救母變文』と題されている。内容は明らかに目連故事の一部であり、文体は散文と六言もしくは七言の韻文を交互に配置する講唱体で、散文末に「云了」などのセットフレーズが見られることから、變文と断定してよいと考える。

ただし、本作品はこれまでの目連變文の何れの系統にも当てはまらない、新しい系統の目連變文であることは、これまで注目されたことはなかったようである。

これまで注目されなかった理由には、二点が考えられる。まずは写真資料が不鮮明であることであろう。実際に、マイクロフィルムや『敦煌宝蔵』では解読することは困難である。さらに翻刻を困難にする第二の点は、この正面文書が全体に墨が塗られていることである。実際に閲覧するとわかるが、墨は二度にわたって塗られている。一度目はおそらく文章を推敲した時に塗られたものと見られ、多くの箇所が削除、挿入が繰り返されている。二度目はさらにそのあとさらに塗られたものと見られ、23行目から55行目までが20数行にわたって大きく削除されている。これらは、実際に演出する時のための加工ではないかとも推測される。

とにかく、本写本は、これらの二点によって、翻刻の対象や校合の資料とされることもなくこれまで放置され、それによって、新たな『目連變文』の発見を遅らせた結果となったようである。筆者は仮にこれを『(擬題) 目連變文

(二)』と題しておく。

紙幅の関係もあり、『(擬題) 目連変文 (二)』の内容や、その発展系統などについては後日に稿を改めるが、その一部についてここに紹介しておく。

墨書きによって削除を指示されている箇所は、極力削除せずにそのままの状態に残してある (図 6-1・2)。

(一張目接合部)

- 23 花萬□□□□
24 十大獻諸天、一切地獄皆飽滿、大地法界悉知。
25 聞尔。 聖□加持□礙。
26 ■■■■■■■■、■■■■■■■■、為母墮入阿毘。
27 製造孟蘭會、飯食廣烈 (列) 珎 (珍)、更獻百般菓奈。
28 餓鬼■各霑喰、似證專為三昧。
29 目連■ (廣) 造孟蘭盆、墮生餓鬼竟 (競) 來奔。
30 番從鋪烈 (列) 千般好、百種珎 (珍) 饑不可論。
31 諸天賢聖皆來降、傍生餓鬼一切奔。
祥雲集動乾坤。
32 地獄三塗皆飽滿、廣致孟蘭盆報母恩。
33 於是我仏世尊、不忍見青提夫人受罪苦、騰身直入
34 五色雲眉間、遂放百毫光照、破阿毘天地獄、鐵床變
35 作即尋座、鑊湯變作漱欲 (浴) 池、罪人恰似化生子、刀山
36 合掌起慈悲、銅柱化作寶幢蓋、從地涌出、劔樹
37 一座是寶嚴、一切地獄皆停閉、都緣孝順目連師 云云。
38 □仏並聞方便、以莊嚴願門示現、導引目連阿孃。
39 暫交地獄既□、鑊湯化作浴池、鐵床變為宮殿、
40 巡環為度衆生、罪趣与拔毒無□。
41 青提一旦落三途、受罪時多骨□枯。
42 頼值如来相加護、出離幽冥再醒甦。
43 鐵床變作清涼殿、身邊罪垢暫時除。
44 變却刀山并劔樹、銅柱化作似蓮敷。

……………

(■は墨で抹消され判読不能の文字。あるいは不要字かと思われる)

これは、仏の加護によって、地獄に落ちた目連の母が救われていく場面である。目連変文の他系統では、この場面についてこれほど詳細に記されるものはない。

この写本の注目すべき点は、この新しい系統の『目連変文』の発見や、その内容ばかりではない。この写本では、死者の供養に使用される『追悼文』、そ

して『薬師道場文』などとともに『目連変文』が写記されていることにも注目すべきであろう。これらは、とりもなおさず、葬儀などの供養に『目連変文』が上演されていたことを推測させるからである。確かに解放以前、諸地域で葬儀に目連戯を演じていたなど、それを思わせる風習が記録に残されている。同時に、先にあげた北京8444『(擬題) 目連変文 (一)』の背面文書の唱衣を考えると、当時の敦煌における死者供養と『目連変文』との繋がりはより鮮明となるのではないだろうか。

まとめ

以上、筆者が中国国家図書館で調査しえた資料のうち、『目連変文』に関わる部分について報告してきた。これまであまり注目を集めてこなかった、というよりも、むしろすでに研究され尽くされたと考えられることによって、近年あまり扱われることのなかった国家図書館蔵の『目連変文』であるが、今回の実見によって一定の成果が得られたものとする。

また、これらを総じて、それぞれの写本を調査し、変文の発展変化を検証しようという筆者の方法は、変文研究においてある程度有効であると確信した。

確かに、これまでの変文研究では、翻刻にあたって原型を復元することに終始してきた感があった。同一系統の断片を収集して、変文のものと形を再現するというこの方法は、確かに古典文献学の本来あるべき態度であったともいえる。しかし、変文が本来上演を目的として臨機応変に削除、追加などの改編がなされるものであったとすれば、このような原型を模索する作業はどのような意味をもつものなのか。むしろ、それぞれの写本について詳細を調査し、それぞれの用途を検証して変文の発展を検討したほうが良いのではないかと考えている。

本稿もまた、そうした視点に立った調査研究の一環であったが、やはりこれによって、これまで読み取りにくかった、変文の実用性がより鮮明になったのではないかと思う。たとえば、北京8445 (麗85) では、『大目乾連冥間救母変文』を実際の用途によって多少改編し二部に分けていることや、北京8444 (成96)『(擬題) 目連変文 (一)』と北京8719 (水8)『(擬題) 目連変文 (二)』では実際にどのような儀式に用いられたかなども汲み取ることができる。また北京7707などでは、筆写することによって功德を求める供養経としての用途があったことや、背景に絵画を伴う絵解きがあった可能性なども読み取ることができるのである。

注

- (1) 中国国家図書館蔵敦煌文献の目録には以下のものがある。

陳垣氏『敦煌劫余録』1931年
王重民氏編『敦煌遺書総目録』〔北京図書館蔵敦煌遺書簡目〕1962年
中田篤郎氏編『北京図書館蔵敦煌遺書総目録』1989年
黄永武氏編『敦煌遺書最新目録』新文豊出版、1986年
敦煌研究院編『敦煌遺書総目録新編』中華書局、2000年
- (2) このマイクロフィルムを利用した複製本に『敦煌宝蔵』全140巻（新文豊出版、国家図書館文献は第56巻～111巻）がある。
- (3) 上海古籍出版社では、現在でも、府憲展氏等を中心として敦煌・トルファン文献複製作業が精力的にすすめられている。2003年4月までに刊行されたのは以下の通りである。

『上海博物館蔵敦煌吐魯番文獻』上海古籍出版社、上海博物館編、1-4、1993年
『法国国家図書館蔵敦煌西域文獻』上海古籍出版社、法国国家図書館編、1-24、1994年
『北京大学図書館蔵敦煌文獻』北京大学図書館、上海古籍出版社、1（D001-D085）・2（D086-D246）、1995年
『俄羅斯科学院東方研究所聖彼得堡分所蔵敦煌文獻』俄羅斯科学院東方研究所聖彼得堡分所、俄羅斯科学出版社東方文学部、上海古籍出版社編、1-17、1992年～
『上海図書館蔵敦煌吐魯番文獻』上海古籍出版社、上海図書館編、1-4、1999年
『天津市芸術博物館蔵敦煌文獻』上海古籍出版社、天津市芸術博物館編、1-7、1996年
- (4) IDP は中国国家図書館（連絡先：北京市中関村南大街33号国家図書館善本特蔵部 林世田氏）と、イギリスの大英図書館（連絡先：The British Library 96 Euston Road LONDON NW1 2DB Kate Hampson）で提携しておこなわれている。ホームページアドレスは <http://idp.bl.uk>。
- (5) 拙稿「変と変文」『国文学解釈と鑑賞』至文堂、2003年6月号
- (6) 金岡昭光氏編『敦煌の文学文獻』講座敦煌第九巻、大東出版社、1990年
- (7) 拙稿「敦煌的故事綱要本」『姜亮夫・蔣礼鴻・郭在貽先生紀念論集』上海教育出版社、2003年
- (8) 文学文獻のほか、以下の宗教儀礼文獻数点を閲覧した。
 - (1) 北京8254（鹹75）『仏説閻羅王受記勸修生七齋功德経』
 - (2) 北京8255（服37）『仏説閻羅王受記勸修生七齋功德経』
 - (3) 北京8256（字66）『仏説閻羅王受記勸修生七齋功德経』
 - (4) 北京8257（字45）『仏説閻羅王受記勸修生七齋功德経』

- (5) 北京8258 (列26)『仏説閻羅王受記勸修生七齋功德經』
- (6) 北京8259 (岡44)『仏説閻羅王受記勸修生七齋功德經』
- (7) 北京8276 (金62)『仏説地藏菩薩經』
- (9) 本写本の研究と翻刻には以下の数点がある。
- 白化文氏「変文和榜題」『敦煌研究』1988年第1期
- 白化文氏「変文和榜題(続)」『敦煌研究』1988年第3期
- 周紹良氏・白化文氏・李鼎霞氏編『敦煌変文集補編』北京大学出版社、1989年
- (10) 向達氏「唐代俗講考」(1937年初稿、『唐代長安と西域文明』1957年収録、『敦煌変文論文録』上海古籍出版社、1982年収録)以来、変文が演じられる場として俗講を考えることが通説となっているが、現存の変文(特に講唱体変文)と俗講を結びつける決定的な証拠がないことや、敦煌の俗講関係文書と講唱体変文の年代が一致しないなど、疑問点も多い。また、俗講は定められた日時におこなわれる特定の講經を指していた可能性もあるので、筆者は変文上演の場としてももう少し広く“通俗講經”と称している。
- (11) 吉師老「蜀女転昭君変」では、街頭で年若い蜀女が「昭君変」を演じていたとの記載もある。
- (12) 変文の絵解き台本説については以下の諸論文がある。
- V.N.Nicolas Sariputra et les six maitres d'erreur fac-similé du manuscrits chinois 4524 de la Bibliothèque Nationale, Présenté par Nicole Vandier-Nicolas avec traduction et commentaire du texte (Mission Pelliot en Asie Centrale, série in-quarto V)Imprimerie Nationale Paris, 1954
- 梅津次郎氏「変と変文」『国華』760号、1955年
- 秋山光和氏「敦煌本降魔変文(牢度叉斗聖変)画卷について」『美術研究』187号、1956年
- 秋山光和氏「変文と絵解きの研究」『平安時代世俗画研究』、1964年(詳細は前掲拙稿「変と変文」参照)。
- ほかに、注目すべき説としては、孫楷第氏“皮影戲台本説”(『傀儡戲攷源』「四、宋之影戲」中国戲曲理論叢書、上雑出版社、1952年)がある。この説はおもに推定に基づくものであり、根拠とする資料は乏しいといわざるをえないが、変文と皮影戲とは確かに見過ごしにしがたい共通点もある。また筆者は、近年甘肅省東部において皮影戲の調査をおこなっているが(共同研究者は咸陽西藏民族学院の袁書会助教)、現在の皮影戲を伴う宗教儀式的なかにも、通俗講經、講經変文と相通ずる点を多く見出すことができる。この点については、後に稿を改める予定である。
- (13) 拙稿「大足宝頂山石窟「地獄変龕」成立の背景について」『絵解き研究』第16号、2002年
- (14) 大足県文物保管所編『大足石窟』文物出版社、1984年

- (15) 以下背面文書の翻刻に関して、浙江大学敦煌学研究中心張涌泉教授、金滢坤氏からのアドバイスを受けている。

(あらみ・ひろし 浙江大学敦煌学研究中心)



図1 北京7707(盈76)(背面)『大目犍連冥間救母変文』

夫食之難也。人之性貪食。若其
望此法者。其有三寶。其一曰。我
我今自教。其意。能相濟。日進。相
應。後。後。愈。愈。進。者。四。時。五。子。則。食。亦。入。口
實。為。極。大。者。舉。然。願。重。不。能。控。解。尤。深。自。進。見。如。斯
行。雖。由。心。刻。我。今。有。開。者。智。小。人。惟。有。世。間。世。界
應。知。後。濟。之。路。且。看。與。世。飯。象。

人人見飯向前進 惟貪其美且宜爭 我記遠東人間
飯持來自教家能法 獨製者不飽之 諸人息意滿米
空有擬食兼力重 八中值大主

目連見何飯與成火潭徒自傳由如五火山崩可島了
之中甘流近血尖言阿羅 兩關淨提施此飯
飯上有七尺神光 持作是香美飲食 飯入口腹
成火已為慢食心不改 可已進芽身其罪 此今痛切莫要
兼採不空相善哉 且人須德兼施 一落一塗符字必
香飯不及口向誰 猶火從口中出 俗間之罪西望
婆羅有性負寶羅多 火既無燒殺罪 明知兼採不由他
一切律行平等意 亦過其心念難 但能捨却慢食心
淨度天堂道是志 香美兼書明兒 罪業之身不自止
不向何計行有道 誰肯與我放阿羅 見飯不能投口
大火無端相撲賜 慢負是阿羅念 只應過去有餘失
阿師是種存烟子 再教於水尚蓮說

圖 2 - 1 北京8443 (霜89)『(擬題) 大目乾連冥間救母變文』

總濟者同飽。高日也。水。明。故。便。而。王。極。顯。連。珠。願
之前。勝。次。大。鮮。曲。疾。至。五。顯。益。善。根。阿。羅。欲
之。益。中。施。得。一。張。飯。能。濟。飯。與。已。未。血。身。與
不相。見。日。進。諸。惡。者。所。不。見。悲。泣。而。泣。求。向。心
前。進。三。連。却。往。一。面。合。掌。明。眼。日。王。佛。阿。羅。與
飯。成。大。飲。水。成。大。家。世。尊。意。慈。救。救。大。難。之
善。從。七。月。十。五。日。一。頓。飯。與。已。未。血。子。身。不。消。相
見。為。當。知。值。地。救。為。雷。雷。復。向。魘。鬼。之。途。

世尊報言此世亦不遠地救餓鬼之徒。此餓鬼切也
這次益蘭益善。投此阿羅。轉。不。餘。鬼。之。身。向。王。拉
城中。作。一。鬼。猶。身。去。汝。欲。得。見。何。處。心。行。身。若。此
弟。比。飯。英。國。貧。富。行。至。大。富。長者。亦。門。前。有。更
在。前。出。來。提。此。佛。法。出。善。作。人。隨。即。是。汝。阿。羅。目。連
總。以。明。道。迷。即。託。佛。持。子。好。有。阿。羅。不。問。與。不。問
百。防。行。於。九。連。無。不。目。河。羅。自。至。一。長。者。香。門。前
阿。羅。作。黑。面。身。從。步。裏。出。來。便。提。目。連。探。以
麻。着。即。作。人。無。喚。至。燒。考。阿。子。背。是。能。向。地。救
中。故。阿。羅。可。不。救。首。身。之。苦。

目連發善意。在。由。已。不。勞。頓。失。及。慈。悲。益。三。陰。身。作。為
身。於。此。為。在。地。救。我。與。之。途。以。威。威。善。考。明。現。受。以
首。身。音。臨。林。新。住。坐。計。得。女。舞。能。地。中。食。不。中
沿。飯。長。流。以。濟。活。明。開。手。看。食。子

圖 2 - 2

自樓如五七九七之中皆流注其久既流注乃重
 兩子往地泉來致項天變地空注向世首之藏
 目連情地德... 似不聞... 惟其...
 安國世首自是... 似不聞... 惟其...
 閻神... 似不聞... 惟其...
 廣善... 似不聞... 惟其...
 上方... 似不聞... 惟其...
 愚者... 似不聞... 惟其...
 他... 似不聞... 惟其...
 非... 似不聞... 惟其...

圖 3 北京8445 (麗85) 『(擬題) 大目乾連冥間救母變文』

上米所既席分竟自下第二百宋者首似在日摩...
 湖園中有大長者名拘摩隨其家巨富財寶充...
 於三寶有信重之心向十善起精出家之志...
 人号曰清提端正雖世上無雙... 與無...
 生有一子号曰目連... 而...
 沙諸仙未見我仙在位之... 所有...
 施於初忽於一日思往他方家財... 三年...
 乃於慈母內之一公困... 慈父之...
 索而施於四速... 已... 而行...
 不肯投索而施到後目連... 盡各...
 善力而... 天... 地... 各...
 五藏... 難... 煙... 灰... 河... 統... 灰... 砂... 塵... 於...
 社... 鬼... 受... 苦... 瘦... 體... 凝... 百... 高... 火... 照... 示... 容... 摧... 解... 噴...
 別... 細... 針... 鼻... 飲... 燈... 滴... 水... 而... 不... 容... 腹... 截... 則... 寬... 於... 木...
 山... 威... 儀... 三... 以... 而... 難... 滿... 當... 余... 之... 時... 有... 何... 言...
 目連父母並為三... 輪... 迴... 六... 道... 各... 殊... 母... 極... 惡... 難...
 父... 善... 力... 上... 天... 堂... 恩... 承... 羅... 彌... 千... 重... 願... 只... 食... 終... 者... 百...
 乞... 願... 康... 寧... 七... 寶... 地... 身... 侍... 候... 樓... 白... 銀... 床... 宜... 間... 坐... 多... 寶...
 穿... 刺... 就... 索... 不... 可... 量... 鐵... 籠... 上... 束... 身... 縛... 鐵... 索... 多... 寶...

圖 4 北京8444 (成96) 『(擬題) 目連變文 (一)』



图 5-1 北京8444 (成96) 背面文書



图 5-2

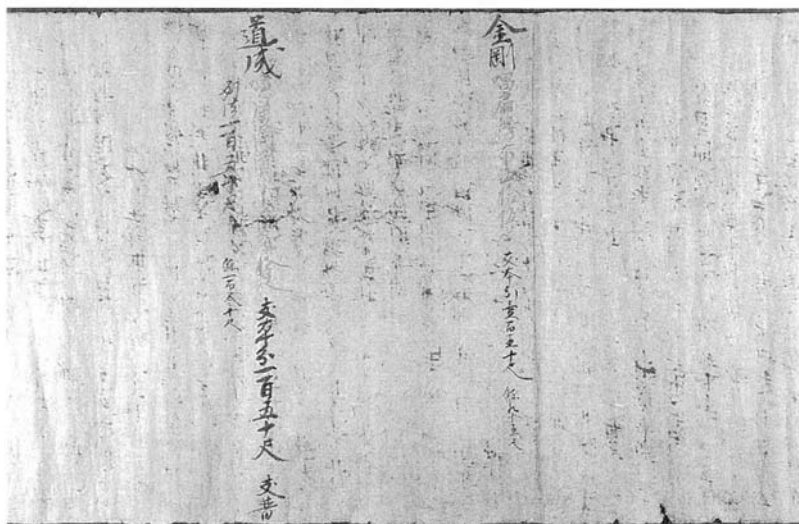


图 5-3

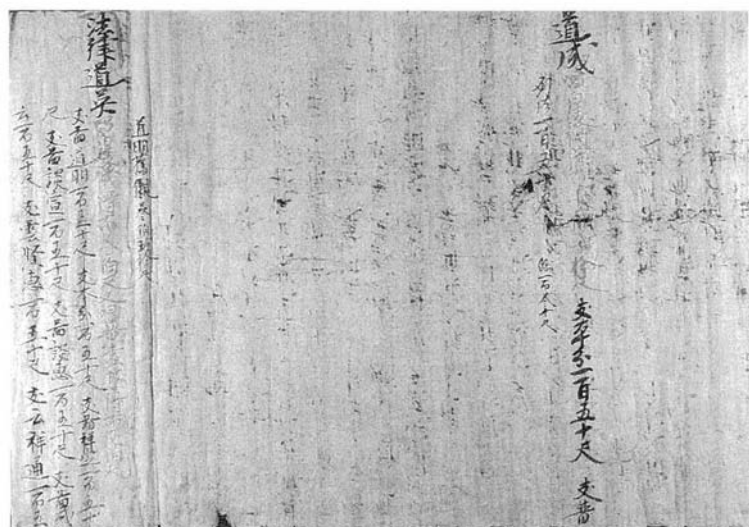


图 5-4

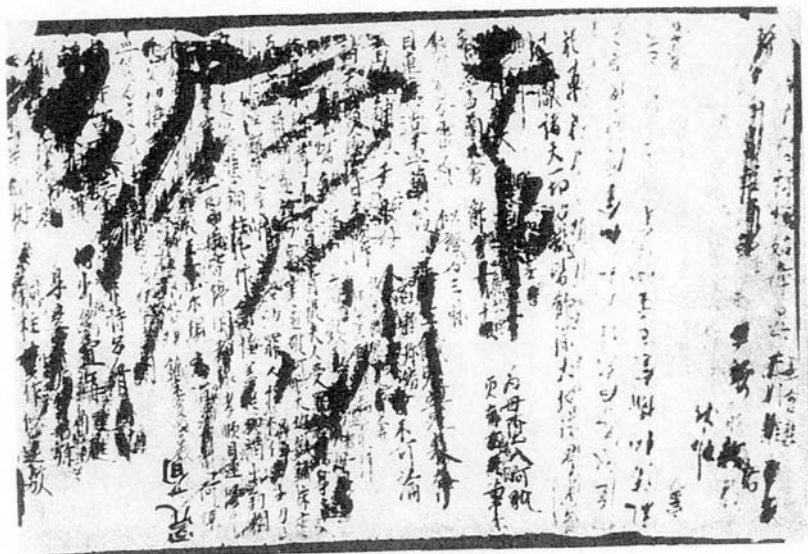


图 6-1 北京8719 (水8)『(擬題) 目連變文 (二)』



图 6-2